

# 教育計画と個性



福田香代子

小さい子どもほど個人差が多いと言われているが、教育的な集団の中でも最も年令の低い者の集りである幼稚園、保育園にはこのことばがよくあてはめられると思う。

実際に一組の子どもを扱ってみると、はじめのうちには似たような体質で、似たような感じと思っていた子どもが、だんだん一人ひとりについて知ってゆくにしたがって、似たようなところがあるどころか、全く身体的にも性格的にも独自のものを持っている個々の子どもが見出されて、共通している面や似ているところを探そうと思っても見出すことが出来なくなってしまう。

一人として同じでないこれら個々の子どもの幾人かを一しょにして保育してゆくわけであるが、保育の計画を立てるにあたつ

てどういうことを心にとめてせねばならぬいか考えてみたいと思う。子どもたちには同一の発達、同一の行動、同一の成就を期待することは出来ない。それ故、組の中の一一人ひとりの幼児の欲求に応じてそれぞれの子どもの特性が生かされ、おのおの十分活動がおこなわれるように計画を立てなくてはならないわけである。一人ひとりの子どもについての保育計画を考え、一人ずつについて実行していくことが出来るならば、それこそ最も個性に応じた教育が出来るわけであるが、それではせっかくの集団生活の意味も無くなってしまうので、結局その年令の子どもたちの発達の標準的なものを基礎として一筋の保育計画を立て、実行するにあたって一人ひとりの子どものことを

配慮しながら、ある子どもはその特性をよりよく生かしめ、またある子どもには適応することを邪魔している障害をとり除くようにしてやらなければならない。それにはまず教師が子ども一人ひとりについて良く理解し、知ることが必要になってくる。

大部分の幼児は幼稚園に入園するまでは、その生活範囲はほとんど家庭の中に限られ、接触している人も家族だけであることが多い。それ故、家庭環境、家族関係、また家庭におけるその子どもの位置は、一人の子どもの知るについて重要な部分となつてくると思う。現在ある子どもをそのまま成長せしめた外部的なものを知り、その子どもの今ある場を知ることによって、子どもの個性がいくらか浮き出てくると思う。しかし、一番大切なことは、教師が子ども自身を観察し知ることである。集団生活に対する適応性、友だち関係、新しい事にぶつかった時の処し方、集中力、興味、遊びなど、あらゆる面にわたってよく知り、その子どもの立体的な、全面的な像をしつかりつかまなくてはならない。子ども一



になつてからは、今までふざけて全然しようにとしなかつたリズムも一生果命出来るようになり、新しく組みかえた比較的積極性のある年令も近い子どもばかりのグループの中でも、他をも受け入れて上手にやつてゆけるようになってきた。

Y男の場合は注意したいと思ふ点に直接ふれずに間接的に良い方を強調して、自分で気付いてゆくようにという方法をとつたが、子どもによつては、このやり方では効果が上らないこともある。子どもによつてそれぞれ異つた方法をとつてゆくわけであるが、どのような場合でも最もよく注意しなくてはならないのは、その子どもの成長の波に乗つて、速度に合わせているかということである。せつかく伸びてきているもの、本来持つている良いものを曲げてしまつたり損ねてしまつたならば、個性教育の意義は無くなつてしまふと思ふ。

あらゆる機会を通じて幼児と共に学び、共に生活して子どもを良く理解し、忍耐心を持つて実行してゆくことこそ、個性に応じた教育をなし得る根本だと思ふ。(東京)

## 個性に応じた教育

青 木 道 代

個性とは、私はそれを人間一人ひとりを持つている人格性として理解したいと思ひます。Aという人間はAという人間として、何をもつてもかえることの出来ない尊さをもつて、彼の場を占め、何人もおかすことの出来ない彼らしさを彼の責任において主張している、BもCもDもこの地上にあるすべての人間が持つてゐる、また平等に主張すべき個々の人間性、これを個性と言つてよいのではないかと思ひます。

現代日本の社会において、教育の問題は渦をなして私たちを押し流そうとしています。勤務評定、道徳教育の問題、教案の画一化、すし詰め学級などと。こうした問題は直接、間接に、また現在において将来において私たちの問題であり、すし詰め学級

の嘆きは地方の幼稚園保育所にとつては小・中学校以上のものがあります。こうした教育の画一化、教師の不足、設備の不備という荒波の中で私たちは今こそ思いをひそめて子どもたち一人ひとりのことを考え、個々の幼い魂と語り合はねばならないと思ひます。百匹の中の迷える一匹の羊、それは画一化した教育企業の目からみれば百分の一の価値しかないかもしれませんが、私たち子どもを愛する教師、父母の目には、九十九匹をおいてもその一匹をさがし求めねばやまない尊い何ものにもかえがたい価値を持つてゐるはずで、百人の子どもたち一人ひとりが、そのような尊さを持つて私たちの心に受け入れられる時にはじめて私たちと子どもとの深い人格的な交わりが